

《久伊豆神社例大祭について》

〈序文〉

久伊豆神社例大祭についてであります。成り立ちや今日までの伝承の経緯などといった歴史的な背景に関しては、学術的に詳細を調査されておいでの研究者の方におゆずりするとして、私は、久伊豆神社の祭礼に江戸時代から今日まで代々氏子として携わって来た数少ない家系の一人として、土地の古老からの口伝や自らの経験によって知り得た「サイジン様のおまつり」に関することを専ら氏子としての視点でお伝えしようと思えます。

昔の越ヶ谷の地域性（保守的・排他的）そのままの部分も脚色することなくお伝えいたします。

ちなみに、旧来から我々氏子は「久伊豆神社」という正式名称はあまり使わずに、親しみをこめて「サイジン様」（おそらく「祭神様」でしょう）と呼称します。

〈名称〉

久伊豆神社例大祭は旧越ヶ谷町の山車祭りで、元禄時代から続いているといわれ、旧来から「サイジン様のおまつり」として久伊豆神社氏子中ではもとより近郷近在の農村部からも“マチのおまつり”として親しまれてきました。（蛇足ながら、旧来から越ヶ谷の中心市街地をマチと呼び、農村部をザイと呼びます。サイジン様のおまつりはマチッコのおまつりなのです）往時は大変に賑わい、かつまた、たいそう華やかであったそうです。特に、太平洋戦争敗戦の暗い世相を吹き飛ばすべく、終戦直後第一回目の例大祭は、当時としては考えられないほど莫大な費用（総費用 100 万円）をかけて盛大に開催されたことから、新聞紙上に『100 万円のばか祭り』と取り上げられ、これ以降「サイジン様のおまつり」には「越ヶ谷のばか祭り」という別称がついたということです。

〈概要〉

久伊豆神社は社格こそ『郷社』ですが、武蔵野国越ヶ谷郷総鎮守として鎮座 1,200 余年の歴史ある神社であり、徳川將軍家が鷹狩りで越ヶ谷御殿にお成りの際に参詣をされていたとのことで、惜しくも戦災で焼失してしまったそうですが、かつては、徳川秀忠公所用の三つ葉葵の定紋入りの御膳を所蔵していたと聞いたことがあります。徳川將軍家が信奉していたため、当時としては通常使用を許されない立ち葵紋が神社の定紋になっています。

神社の正式な年中行事・神事ごととしての例祭は、毎年 9 月 28 日を期日と定め、神職により社殿において厳かに執り行われております。

実は、一般に言われている山車祭りとして久伊豆神社の例大祭（「サイジン様のおまつり」）は、神社の正式な年中行事ではありません。氏子主催・主導による氏子の行事、つまりは氏子が主役のイベントなのです。

しかしながら、実に不遜なことなのですが、我々氏子は、神社の正式な年中行事・神事

ごとの例祭を『陰祭り』と呼び、氏子主催・主導の山車祭りを『本祭り』と呼ぶのです。

神社の正式行事ではないとはいえ、もちろん神社と不可分には『本祭り』は成立し得ません。

山車の引き回し行事は、鳳輦によって旧越ヶ谷の街中へお渡りいただいた（渡御）ご祭神の御霊を年番町（ねんばんちょう）内に設えた御仮舎（おかりや）にお迎えし、氏子一同総出でお慰めするために行うものということになっています。

〈渡御・還御〉

2日間行われる『本祭り』は、越ヶ谷の街中へ御神霊をお迎えすることから始まります。

初日の早朝、神社社殿において氏子総代をはじめとする神社役員、年番総代・年番青年会長をはじめとする各町会の代表が臨席し、鳳輦への御霊入れの式典が執り行われ、神霊が鳳輦によって街中へお出ましになる「神輿渡御」（しんよとぎよ）が始まります。

ちなみに、お帰りになる「神輿還御」（しんよかんぎよ）においても同様な儀式・行列が行われます。

渡御の行列は年番町の氏子が先頭で露払いと警護を務め鳳輦をお守りします。

「たっつけ袴」に「草鞋」姿で手に「ジャラン棒」と俗称される金棒を持った「おまつりこ」（＝「お祭り娘」？）と称される年番町内の若い女性（17～20歳位）2名が行列の先頭に立ち、続いて、実行責任者である年番青年会長率いる年番青年会が「越ヶ谷の木遣唄」を歌いながら行列を先導します。ご参考までに申し上げますと、「越ヶ谷の木遣唄」は越谷市指定無形民俗文化財第1号です。

隊列の様子詳細の説明は割愛しますが、年番町の宰領で人数の増減がありますが、概ね300～400名程の多人数の神幸行列で、普段は一般に公開していない数百年の年代物の四神獣の造形物や神社旗なども行列の中に観ることができます。

〈鳳輦〉（ほうれん）

「鳳輦」による御神霊の渡御と申し上げましたが、久伊豆神社の「鳳輦」（＝神輿）は一般にいわれる「おみこし」とは趣を異にします。かなり古い時代の様式の神輿だそうですが、担ぎ棒が二本棒の神輿なのです。

二本棒ですから、物理的に横揺れに弱く、荒々しい担ぎ方には無理がありますし、久伊豆神社のご祭神は因幡の白兔の逸話にもあるように大変慈悲深く争いを好まない大国主命ですので、本来は「鳳輦」を荒々しく揉むことを厳に慎み、粛々と進まねばならないものなのですが（私の子供の頃などは粛々とした神幸行列であったと記憶していますが・・・）、最近では、見物客へのサービスの意味もあるのでしょうか「鳳輦」に奉納の浄財（＝賽銭）が上がった時には揉むのが慣例になってしまいました。

ところが、本来激しい担ぎ方をするように造ってあるものではありませんから、繊細な飾り付けの金具の御簾類は揉まれた衝撃で破損をしてしまうことが多々ありますし、今ま

で事故（怪我人）が出ていないからいいようなものの、安定性の悪い二本棒の神輿を揉むのは危険きわまりありません。

私が事実上の実行責任者である“年番青年会長”として平成16年のサイジン様の祭りを取り仕切った折のことですが、「出来れば揉まずに古式通りに肅々として欲しい・・・」と常々考えていたこともあり、担ぎ手の責任者にこの旨を伝えたところ、「わざと揉んでいるわけじゃない。最近の若い者はこらえ性がないから、疲れてくると棒から肩をはずすものが出てくる、そうすると二本棒だから神輿が傾く、傾いた方は傾きを直そうと棒を押し上げる、反対側は押し下げられたことになるから持ちこたえようと押し上げる、この繰り返しで結果的に神輿が揉まれることになる」「実際、肅々と担いでいるよりも揉んだ方が手抜きが出来て楽だ」と言われました。

昔の人は我慢強かったのか、信心深かったのかと関心をしながらも、苦笑せずには居られないような裏話でした。

「鳳輦」の担ぎ手についてもご説明しましょう。

「鳳輦」の担ぎ手は誰でも良いと言うわけではありません。

本来、「四丁野」（現在の宮本町）の「生え抜きの家のお惣領」に限るとされています。

江戸時代には四丁野村の迎攝院は將軍から五石御朱印寺領を与えられており、また、住職が久伊豆神社の別当職を兼務していた（別当寺であった）ことから四丁野村の氏子（＝迎攝院の檀家）に与えられた特別待遇なのでしょう。昔は希望者が多かったでしょうから、「生え抜き（旧家）のお惣領」という枠をつけ、本家筋であっても次男以下の者や分家筋の者には担がせなかったのでしょう。

しかし、今日では、そのような枠は有名無実となり、次男・三男・婿・分家大歓迎でも担ぎ手の員数を揃えるのに苦勞をしているようです。

〈山車〉（だし）

「サイジン様のおまつり」では、旧越ヶ谷の日光街道沿いの表町八ヶ町（本町1～3・中町・新石1～3・弥生町）から各1台、合計8台の山車の引き回しが行われます。

越ヶ谷の山車の特徴は、車輪が3輪でとり回しが難しく、運行には職方（鳶）が重要な役割を果たすということです。旋回をするときには4～6人の職方が1輪の前輪を持ち上げながら気合いをいれて勢いよく一気に回ります。職方が祭りに欠かせないというのは、江戸時代にお大尽の旦那衆が各町のスポンサーであった頃に、町内鳶におまつりを楽しませながらも仕事を与えて祝儀を渡すという粋なはからいの名残のような気がします。

山車の引き回しは2日間で6回ですが、内2回「渡御・還御」の時だけは神様に従って氏子総出ですので8台連なつての引き回しになります。他の4回は「らんびき」（＝「乱曳」？）と言われ、本町側と新石側に別れて各4台を連ねての引き回しになります。

各山車の最上段には上下可動式で人形が据え付けられています。

各町の人形は以下の通り

新石壺：神武天皇
新石式：鍾馗
新石参：武蔵坊弁慶
弥生町：日本武尊
本町壺：龍神
本町式：楠正成
本町参：素戔嗚尊
中町：鍾馗

各町の人形は、日本の神であったり、中国の神であったり、伝説上の人物であったり、実在の人物であったりとまちまちですし、また、それぞれが選定された理由は定かではありませんが、新石式と中町が共に「鍾馗」を使用していることにお気づきと思います。

実は、かつては新石式の人形は「鍾馗」ではなかったのです。

新石式町内では八幡神社を守護しており、ご祭神の「誉田別尊（ほむたわけのみこと）＝15代応神天皇」の母君の神功皇后の人形を山車の人形としていました。8体中で唯一の女の人形だったのです。諸般の事情で手放し、現在は「鍾馗」を使用しているのです。

新石参もかつては猩猩（しょうじょう）の人形を使用しておりましたが、やはり手放し、現在は武蔵坊弁慶を使用しています。

昔の山車は3層構造でかなり高さのあるものでしたが、電話線の架設にともなって7台が2層に改装しました。

時代の流れで止むを得ないことなのでしょうが、往時とは大分様子が違ってしまったのは残念なことです。

〈現況〉

「サイジン様のおまつり」は、山車を所有している旧越ヶ谷の日光街道沿いの表町八ヶ町（本町1～3・中町・新石1～3・弥生町）に街道裏の裏町内（新道・音和・御殿町・柳町・宮前・東宮前・中町西・四丁野道・袋町・元御殿）が加わって催行されるのですが、主体はあくまでも表町八ヶ町です。

表町八ヶ町で順送りに『年番（ねんばん）』を務め、祭礼の開催の成否及び祭礼一切に関する権限は総て『年番』にあります。

ちなみに、昔は、〔他町と揉め事があったときには腕づく力づくで決めた〕とか、〔他町との揉め事の交渉には、裏から羽交い絞めにされないように壁を背にして立て〕と言われた時代もあった〕と聞いていますが、まんざら大げさではないと思います。〔交渉が決裂すると山車をそのまま現場に置いたまま帰ってしまい翌朝まで放置した（山車は町内のシンボルですから、他町内の人間は動かすことはおろか触ることすら出来ません）〕とか、〔大沢橋を渡って隣町の大沢町まで山車を乗り入れて引き回した〕とか、〔日光街道から外れて

土手まで山車を引き回した]とか、交通規制の厳しい今日では信じられないようなことがたびたび行われたようです。

とはいえ、昨今では『年番』1町内の独裁専制で総てを取り仕切るのではなく、表町八ヶ町で合議をし、全会一致で決定するという実に民主的な形になっています。

逆に言えば、全会一致でなければ何も決めることができない状態でもあり、かつては必ず定期開催（近年では、1年おきに2日間・従来は毎年3日間の開催）であったものが、全会一致の賛同を得られないがために開催順延、順延で、在る時は2年おき、また在る時は3年おきというような不定期開催になってしまったという残念な状態に陥っています。

順延の原因は、市街地開発が進行し、居住人口減少による祭礼参加人員の減少、および、運営費の減少です。祭礼の費用は各町ごとの独立採算であり、1町あたり200～300万円ほどのコストを見込まなければなりません。『年番』にいたっては祭礼総体に関する費用負担や神社関係の守護の費用の負担もあり、700万円以上の出費は覚悟しなければなりません。

原資は自治会費の中の祭礼関係費用ならびに当日の寄付（祝い金）のみですから、軒数の少ない町内は1軒あたりの負担が大きく、本祭りのために毎月数千円ずつ積み立てをしているというのが現状です。

現在、この状況を打破するべく、各町から有志を募り、祭礼の存続・継承、定期開催を主目的とし、相互扶助を基本に実行委員会制の導入を検討しているところです。

〈開催時期〉

開催年は未定と申し上げました通り、従来は毎年3日間開催だったものが1年おきに2日間開催となり、ある時は2年おきとなり、3年おいたこともあったりと不定期となってしまったのはまことに残念ですが、概ね2年おき（3年に1度）の開催を目標にしています。

ところが、開催年は未定でも、開催時期は従来やしきたりを固持しています。

山車の引き回し行事は9月28日の神社の正式行事の例祭の後で無ければなりません。

昔は曜日に関係なく9月28日・29日（+30日）でしたが、現在は10月第2月曜日が休日となったことから、10月第2土・日曜日の開催に固定されつつあります。

〈見所〉

「サイジン様のおまつり」（本祭り）の見所についてご説明しましょう。

正直なところ「サイジン様のおまつり」は観覧型のおまつりではなく参加型のおまつりですから、往時の非常に華やかで賑わっていた頃はともかく、現在では単に観ているだけでは楽しいものではないかもしれません。

しかし、旧来から変わらない古代絵巻さながらの「渡御・還御」の鳳輦行列が一番の見所でしょう。

そして、山車の引き回しでの旋回です。大沢橋際・旧駅前通交差点（越ヶ谷2丁目）・越ヶ谷・瓦曾根境界交差点（越ヶ谷1丁目）での山車旋回の取り回しは迫力があります。

追記 〈伝統芸能〉

「サイジン様のおまつり」に関わる伝統芸能についてご説明しましょう。

まずは、越谷市指定無形民俗文化財第1号に指定されている「越ヶ谷の木遣唄」です。

大火で千代田城が焼け、越ヶ谷御殿を江戸に移築した際に越ヶ谷の職人が江戸木遣を習い覚えたものが越ヶ谷独自の形となって伝ったのだと聞いたことがあります、真偽のほどは分かりません。

「サイジン様のおまつり」の当日は、神幸行列の先頭で年番町により歌われますし、各町の山車の引き回しの際にも歌われます。

おまつり以外でも越ヶ谷地区の各種会合や宴席の締めくくりの時には「越谷の木遣唄」は「締めの木遣」として欠かせないものです。

「締めの木遣」の後には「手締め」がつき物ですが、越ヶ谷には「越ヶ谷締め」（別称：旦那締め）と言われる独特の手締めがあります。

いわゆる「江戸締め」（通称：関東一本締め）は3・3・3・1の10回の手打ちで締めますが、「越ヶ谷締め」は3・3・1の7回の手打ちで締めます。さいたま市（浦和区付近）にも「中仙道締め」と呼ばれる、同様に3・3・1の7回の手打ちで締める手締めがありますが、「越ヶ谷締め」は実にテンポのゆっくりとした手締めなのです。昔、庶民が酒を口に出来なかった時代、旦那衆が宴席の締めくくりに酩酊した調子でした手締めだからゆっくりとしたテンポであり、「旦那締め」の別称がついたとのこと。

次に、祭囃子ですが、越ヶ谷街中には伝統の祭囃子は特に伝わっていません。祭囃子の囃子方は神明の神明囃子、大相模の後ろ方囃子といった近郷・近在の方々です。

祭囃子と言えば、例大祭初日の午前零時に年番町が「一番太鼓」という囃子を叩きます。

年番町の「一番太鼓」を聴くために多くの人が集まりますので、年番町は振る舞い酒をして聴衆に応えます。

各町の囃子方は隣の町の囃子の音が聞こえたら囃子を始めます。こうして囃子の音のラリーのように八ヶ町総てで囃子が行われ祭礼が始まります。

一番太鼓では「年番フタツパヤシ」と言われ、八ヶ町総ての囃子が終わった後、締めに年番町で再度囃子が叩かれ一番太鼓が終わります。

夜が明けて午前6時になったならば、また年番町から始まる祭囃子が町中に響きます。

「一番太鼓」は旧来の風習ですが、最近では、迷惑防止条例とか騒音防止条例とかでクレームがつくことがあります。

雑駁で稚拙なご説明に終始してしまいましたが、ここに記した裏話を踏まえて「サイジン様のおまつり」観ていただくと、また違った面白さを感じられるかもしれません。

田熊吉広 稿